

とかす力 (八木重吉の詩を愛好する会会報)

(事務局) 〒270-1406 千葉県白井市中 205 小林正継

Eメール kmat27aiko@gmail.com

携帯電話 09061674553

☆ 第 28 号

☆2023年(令和5年)
7月16日 発行

【この28号は急遽特別号として発行します。】

★「八木重吉の詩を愛好する会」事務局の天利武人牧師が亡くなりました。

今号は悲しいお伝えをしなければなりません。昭和60年2月「八木重吉の詩を愛好する会」の結成メンバーの中心であった天利武人牧師が7月6日(木)18時50分、肝細胞ウイルスがんで逝去されました。

1985(昭和60)年2月3日発起人として集まった4人(天利武人、青木紀夫、大山八、小林正継)がまず愛好会を結成し、すぐに、賛同する仲間を募集したところ、約20名集まり、第1回の定例会をもって会の活動がスタートしました。最初の4人が集まった場所が天利牧師の教会であり、私とその教会の信徒であった関係で、教会が事務局となりました。その後青木氏、大山氏が亡くなり、天利牧師と私が活動を企画しリードしていく体制になっていきました。

最近、天利牧師が2006年12月に左足離断という大変な苦勞を背負ってしまった事から、私が担当の会報発行活動中心に、私ができる範囲の事で活動して来ていましたが、昨年今までの活動をまとめるべく2人で努力し『八木重吉を慕いて』の発行にこぎつけました。実は、天利牧師は2021年に、肝細胞ウイルスがんの宣告を受け、良い治療法が無く、時間とともに少しずつ悪化していくと言われていました。しかし持ち前の気力と行動力で教会の牧師としての務めを十分に果たしてきました。6月に入り腹水が溜まり始め入院して腹水を抜くと今度は体力が衰え、呼吸も苦しくなることが多くなりました。それでも6月25日には教会の講壇に立っていつも通り力強く説教をしました。しかし7月に入るとさらに体力が衰え、7月5日(水)からは話すのも苦しくなり、6日(木)に私が会った時には、「ここまで頑張ったけど、いよいよもうだめだ」と言いました。(実際はもうだめだしか言えませんでした)その後身内の人々が駆けつけてきましたが、ついに18時50分天に召されました。なすべき務めを全うした生き方でした。悲しいけれど、教会信徒にもすでに病状を伝えていたので、突然の死に悲しむというよりは、立派に生き抜いた不屈の精神に「本当に今までありがとうございます」という感謝の思いで天利武人牧師を見送りました。

八木重吉に関するエッセイを一つ、別冊の「八木重吉との出会いとその詩の魅力」第5集に載せましたので、この誌面では天利牧師を偲び、牧師が書いた他の文章と新聞記事を紹介します。順序としては過去へさかのぼる形になります。

① まずは本来の仕事である牧師として昨年(2022年)信徒向けに書いた文章です。

神の恩寵—私の青春時代—

それとも、神の慈愛があなたを悔改めに導くことも知らないで、
その豊かな慈愛と忍耐と寛容とを軽んじているのですか。(ローマ2:4)



哲学者キェルケゴールが言うような意味で「このために生き、このために死ぬる」真理に自分の生涯を委ねたい。私にとってその真理は、主イエスキリストに他ならない。私は主イエス・キリストに従い献身した。20歳の時、ある大集会でイエス・キリストの「証し」をし、大学在学中に献身を公にした。

高校を卒業した私は大学受験に失敗し、また失恋の傷もいえぬまま家出をし、和歌山の山奥を死ぬ覚悟でさまよった。あたりは暗くなり、霧雨がふっていた。ふと目を上げると遠くに小さな光が見えた。死ぬ気であった私が、何故か不安と淋しさの中でその光に向かって歩んでいた。そこは製材業をいとなむ家で、その後私はそこに住み込んで働くことになった。ところが、その主人が経済的に破綻し、自殺してしまった。製材所も閉鎖し、従業員は和歌山市内に職を探し、私も印刷工場で働くことになった。

そこで知らされたことは、実に私はわがままな放蕩息子だったことだ。「人の死」に直面し、また青春を過ごす

中で罪深い自分を知った。その年の暮れ、私は家に帰る事を決心した。私が家に帰ると、父は「イエス様がお前に示そうとすることを祈って聞きなさい」と言った。私のこれまでの人生が神から離れていたことや、感情的にその時その時の快樂に生きた事の罪を、神は御言葉を通して示して下さった。

1 つは、中学生の時同級生の 1 人にいじめられ、かっとなった私は椅子を持ち上げ彼の頭目がけて殴打した事。額から流れた彼の血を思い出し、イエス・キリストが流された血は私の罪のためであったと感じた。二つ目は製材所の主人が死んだ時のことを思い出した。この肉体のはかなさ、空しさ。その時、私は主イエス・キリストの福音、神の言葉が希望と平安を与えることを確信し、イエス・キリストに献身する思いが与えられた

聖契神学校(目黒)、千葉バプテスト神学校(幕張)で学びながら、松戸で開拓伝道を始めた。もちろん人は、全てを新しくし真人間になって聖なる人のように生活することは出来ない。多くの罪を抱えながら、今日を迎えている。自分の心の中で神の恵みと愛を感じつつ、一方で罪を犯す生活で、二律背反する心に悩みながら、その後、横浜の新契約バプテスト教会の牧師を 10 年間務め、その間、洋光台の開拓伝道もさせて頂いた。36 歳で父、操が牧会していた第一宣教バプテスト教会を引き継ぎ牧師となった。罪深い私がイエス・キリストの身代わりの死を通して、神様に赦されたことは、実に神の選びと御はからいがあったからに違いない。

神を愛する人々、即ち、神の御計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。なぜなら、神は、あらかじめしっておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。(ローマ 8 : 28 - 30)

2006 年 12 月、60 歳の時突如襲って来た劇症型壊死性筋膜炎の疾病により左足を股関節から離断、生と死の狭間を歩んだ結果、九死に一生を得て神の恵みと導きをあふれるばかり頂き、牧師として第二の献身の覚悟をもって務めをさせて頂いている。

聖書の中に出て来る預言者やイエス・キリストの弟子、使徒となった人々は皆、それぞれ異なる生き方の中で弱さを感じつつ、それでも生涯の召命感をもって主に従っている。旧約聖書に出て来る預言者ホセアは、イスラエルが周囲の国々の偶像礼拝にふけり、天地創造の唯一の神に対して霊的、宗教的な姦淫の罪を犯していた時、その民を「さばく」神の託宣を受けた。神はホセアに対して、それがどんなに大きな罪なのかを知らせるため、別れた姦淫の妻、ゴメルを再び妻として迎え入れるよう命じ、霊的、宗教的罪の現実を人々に示した。しかしその子供達はやがて神から離れ、神の祝福から取り除かれた民族の子孫となってしまう。この預言者ホセアは悲哀に満ちた生涯の中で神の召命に生きた。

私が今日支えられて働きを続けられる心の根底には、神の恩寵があり、神の不動の愛があった。私が病院の中で生死をさまよっていた時に見た幻は、まさしく自らの罪の、神の前での悔改めと、罪を精算するためであったのかもしれない。おどろおどろし三人の悪魔が出てきて私を死の滅びの中に突き落とそうとするのだ。10 日間の意識不明と精神的闇の中でどんなに苦しかったか…。しかし最後にその幻の中で見たものは、美しい花々が咲き乱れる畑の中で、天使のような賛美の歌声が聞こえる光景である。神の愛と導きにより、私の召命は神の選びの中で計画されていた。私は何とも言えない平安に満たされた。ここが天国なのか? その時、息子の「お父さん」という声で目が覚め意識が回復した。その後 3 か月の入院を経て退院した。この病床での幻の体験が私の第二の献身につながった。

もしそうでなかったら、世の初めから幾度も苦難を受けなければならなかったでしょう。しかしキリストは、ただ一度、今の世の終わりに、ご自身をいけにえとして、罪を取り除くために来られたのです。そして人間には一度死ぬ事と死後にさばきを受けることが定まっているように、キリストも、多くの人の罪を負うために一度、ご自身を捧げられましたが、二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。(ヘブル 9 : 26 - 28)

② 次に愛好会 15 周年記念として発行した「ひとすじ」(吉野登美子夫人追悼文集)の冒頭の文章(1999 年)

八木重吉の詩を愛好する会と登美子夫人

1999 年 2 月 13 日夕方、私と事務局の小林さんと 2 人で、鎌倉の吉野家を訪ねました。2 月 12 日に逝去

された登美子夫人のお通夜に参列するために。翌14日が吉野家での告別式でした。また4月10日には、八木家で分骨式の記念集會がもたれました。登美子夫人とは、15年間、愛好会と共に交流を持たせて頂いていただけに、私にとっても悲しく、寂しいお別れでした。重吉さんの詩の、生きていた大きな背景を失ったような寂しさでした。愛好会発足以来15年、愛好会の皆さんとの交流やいろいろな会話の中で、重吉とともに登美子夫人のことがよく話題になりました。

佐古純一郎先生との対談の中で、佐古先生が「忘れられないのは、確か紀野一義さん司会で登美子夫人と対談した時のことです。重吉が療養中のある時、登美子夫人が病室に入っていったら、重吉が病床でひざまずいて〈おお主よ〉と言っているのが聞こえて、入ってはいけないと思い、外へ出ようと思ったと、登美子夫人が言っていたんです・・・」と話されたのを聞き、登美子夫人の信仰の心を深く知ったように思いました。重吉の信仰の心を理解できた夫人の、靈的雰囲気をつかえる心を知ることができたからです。また佐古先生は「若い時はきれいな人だったんでしょうね、八木重吉は登美子夫人の陰の影響がかなりあると思いますね。また心の美しい女性だったと思います。」とも話されました。

愛好会の小川宣二さんが登美子夫人とお交わりの中で、会う度に「小川さんは桃子と同一年なのね」とおっしゃる言葉が胸を打ったと語っています。

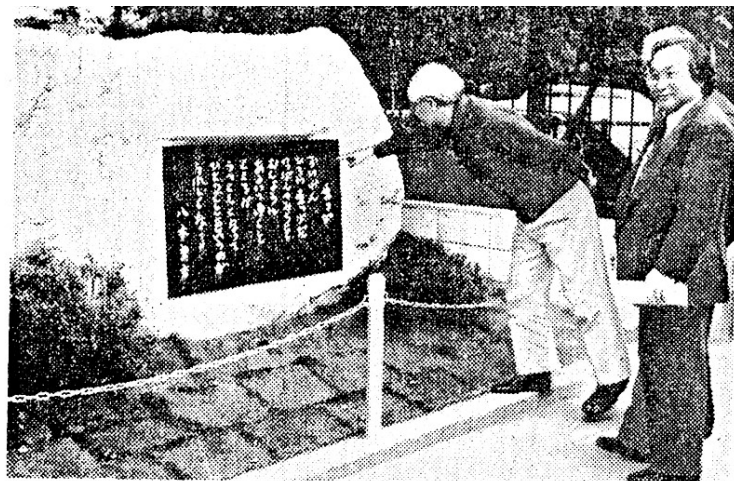
鬼島芳雄さん（愛好会、日本詩人クラブ会員）は、「愛する少女への書簡文、日記を通して彼（重吉）の言葉通り〈人は瞬間を美しく生きたい、今日を美しく生きたい、今日を生きることに最善をつくし・・・〉を求めた。つまり登美子夫人への愛は、彼の人間形成の上で大きなプラスとなった。」と語っています。

私の姉（戸塚園江）が召天した時も、登美子夫人はすぐ励ましの手紙を寄せて下さり、御花料まで添えて下さいました。愛の豊かで、人の悲しみや喜びを共に分かち合っただ下さるやさしい方だったと思います。

いずれにしても、15年間の愛好会の働きを進める上で、私達にとって、大きな柱であったことは言うまでもありません。いずれ愛好会の方々とお会いし、もっともっと登美子夫人のことを語り合いたいと思います。

③ 愛好会活動の原点となった詩碑「原っぱ」建立時の新聞記事（東京新聞 1985【昭和60】年10月30日）。持ち前の行動力で、愛好会結成から一気にその年に詩を完成させ、新聞も7、8社に取り上げてもらいました。

（記事の下の方が欠けていることをご了解願います。）



完成した詩碑を見る天利さん（右手前）たち
■ 柏市旭町で

旧制東葛飾中学（現県立東葛飾高校）で英語教師をし、昭和二年に死去した詩人、八木重吉の詩碑がゆかりの地、柏市旭町の東葛飾高校校庭に完成。米月四日午後、東葛飾中学に学んだ沼田知事ら関係者を招いて除幕式が行われる。東葛飾を卒業して教師をしている柏市在住の天利武人さんが事務局長をしている「八木重吉の詩を愛好する会」が呼びかけ、二月に準備会、四月に商工会議所会頭の寺嶋周三さんが会長となって建立委員会を設け、卒業生を中心に、関係者へ浄財の協力を呼びかけてきた。

「詩碑建立を実現させる人でも多くの方に、清澄木重吉の詩のすばらしさを知ってもらいたい」というに、二百人から三百四十人が寄せられた。碑の材料は群馬県・鬼の神流川から採取した大理石の石灰岩。アフリカベ、みかげ石には、原っぱと無た「ずいぶん ひろい原だ、いっほんのみちを、よように、歩いていくと、るが、うつくしくなるとりごとをいうのが、うつくくなる」と八木重吉の詩、直筆で刻まれている。は、一・八尺、奥行三二、横三・五尺。八木は、大正六年鎌倉卒業後、東京高師を経て、千葉県御影師範教師として

詩人・八木重吉の碑完成

ゆかりの地（東葛飾）に

卒業生、関係者らの浄財で

★ 私（小林正継）と天利武人牧師の2人3脚の歩み

私と天利牧師の関係は、基本的には教会の牧師と信徒という関係でした。私が教会に通い始めた10代後半、教会の初代牧師の息子として父子で教会の奉仕をしながら、新たに伝道所を開拓もしていました。私は7歳年下ですが、柏の教会でも伝道所でも天利牧師の指導を受けていました。そしてともに初代牧師の夫人、つまり天利牧師の母親から八木重吉の詩集（佐古純一郎氏編集の詩集）を紹介され好きになり、重吉が東葛飾高校でかつて教えていた事実を知って、東葛飾高校を母校とする私たち2人は、重吉の詩を高校内に建立したいと言う思いが高まった時、愛好の会を作ろうという事になり生まれたのが「八木重吉の詩を愛好する会」でした。

行動力のある牧師が詩碑建立を大胆に推進し、私は協力と共に、情報提供の会報を作る仕事をしました。2人3脚で、最初の10年余りは熱心に活動を発展させていきました。ゆかりの各地訪問、講演会の企画、絵葉書の作成や10周年記念誌の発行等、最初の会報である「いっぽんのみち」は1カ月おきに出し51号まで行きました。

しかしその頃から、牧師は教会活動で、私は教師の仕事が忙しくなり、活動を縮小せざるを得ませんでした。そこで不定期の発行をする会報に代え、「原っぱ」と名付けました。年1回ぐらいになりましたが、情報をまとめて提供しました。柏市内の文学散歩と茶の花忌情報は提供出来ました。集めていた会費はいただかない事にもしました。ただ天利牧師も私もさらに忙しくなり、会報を担当している私が編集する時間が無くなってストップしてしまいました。4年間ぐらい休止状態になりました。しかし幸いに私が転勤等の環境の変化で余裕が戻ってきました。そこで会報の復活を決断しました。A4の大きさに変えて「とかす力」と名付け、最初は年に数回発行しましたが、やはり翌年からは年1回になってしまいました。それでも約20年続き、今号で28号になりました。続けたおかげで、昨年愛好会の歴史をまとめるにあたって非常に役立ちました。愛好会の歴史も38年で、あと少しで40周年、そこまで天利牧師と一緒に続けて解散とも思っていたのですが、ここで天利牧師を失い、一瞬どうしようかと考えました。しかし母校の東葛飾高校があと少しで100周年になり、その記念誌に八木重吉の名を残したいと働きかけている所ですので、そこまでは一人でもやろうと再決断しました。

これで愛好会の結成の最初のメンバー4人のうち3人が亡くなり、私だけになってしまいました。しかし茶の花忌でお会いし、会報の発送に応答して励ましの言葉をくれる方々もいますので、私一人でも会報の発行は可能な限り続けます。そのうち、IT社会がさらに進めば、私の今の会報作成技術ではついていけなくなります。紙の時代は終わるでしょう。私自身の健康不安もありますが、4年後の75歳までは頑張りたいと思っています。その間に生家の重吉記念館に関しても協力したいことが沢山あります。今止めるわけにはいかないと思っています。

そういうわけで、会報の発行は続けます。研究も活動も続けます。発行を喜んで下さる皆さんが少数でも存在する限りは、発行し続けます。茶の花忌への協力も続けます。天利牧師と2人3脚で始めた愛好会の活動記録を後世の重吉ファンに残すため努力を続けます。それが愛好会結成を最初に呼び掛けた牧師に報いることだと思うからです。

★ あなたの「八木重吉との出会いとその詩の魅力」原稿、継続募集中

（募集） 題：「八木重吉との出会いとその詩の魅力」（この内容に沿うなら別のタイトルでもOKです。）

字数：2000字程度（原稿用紙5枚程度、パソコンのワード歓迎）

締切：なし（随時お送りください）

送り先：メール（kmat27aiko@gmail.comへ）か

郵送で 〒270-1406 千葉県 白井市 中205 小林正継 へ

★八木重吉の詩を愛好する会ホームページ案内

ホームページアドレス <http://www.yagijuaiko.com/> （更新が遅れていて申し訳ありません。）

Eメールアドレス kmat27aiko@gmail.com （管理者小林正継）

今回第5集（3人分）を発行します。そしてその後集大成して1冊にまとめる予定です。可能ならまだ書いていない方は、書いていただくと加えられます。重吉を愛する皆さんの本にしたいのです。

*私が71歳で、リンパ腫という血液のガンも体験し、つい最近コロナウイルスにも感染したことを思えば、私より先輩の方々が亡くなっていくのは仕方ないのですが、愛好会38年の歴史の過程でも多くの方々との別れを経験して、やはり寂しいものです。皆さんとにかく元気でいてくださいね。送った封書が住所不明で戻ってくると、ひょっとしたらと思ってしまう。共に可能な限り健康を維持して行きましょう。私の一番の願いです。